伊藤義教著『ゾロアスター教論集』

平河出版社, 2001年10月, xxi+566頁

青 木 健^{*}
AOKI Takeshi

I. 伊藤ゾロアスター教学の全体像

本書は、『古代ペルシア——碑文と文学——』(1974),『ゾロアスター研究』(1979),『ペルシア文化渡来考——シルクロードから飛鳥へ——』(1980)に続き、伊藤義教氏(1909-96)のゾロアスター教研究の掉尾を飾る著作として、著者の没後5年にして世に送られた論文集である。死後出版ではあっても、伊藤氏と充分に責任を分かち合える弟子たち(上岡弘二氏及び岡田明憲氏)によって校訂されているので、本書は事実上伊藤ゾロアスター教学60余年の成果の集大成と見做すことが出来る。その意味で、本書の評価は伊藤ゾロアスター教学全般の評価に直結するだろうし、評者の見る所では、本書は伊藤ゾロアスター教学の性格を如実に反映している。また、当然ながら本書とその背景にある伊藤氏の業績は、今後の日本のゾロアスター教学の出発点となるであろうから、ここでは直接本書の内容に触れる前に、伊藤ゾロアスター教学の全体像から筆を起こしたい。

伊藤氏は、インド・イラン言語学の学識に関しては、卓越した能力を持っておられた。20世紀の中盤以降に活躍した世界のゾロアスター教学者を見渡しても、アヴェスター語とパフラヴィー語を均等に操り、しかもそれぞれに付随する膨大な隣接分野の言語知識まで自家薬籠中のものとしている学者は10人もいない。これが、伊藤ゾロアスター教学の最大の武器である。更に、伊藤氏の几帳面な性格が文献学的側面に反映され、この長所を一層際立たせている。満州事変から太平洋戦争中の日本と云う劣悪な研究環境から身を起こされた伊藤氏の境遇を想起すると、この言語学的・文献学的能力には瞠目せざるを得ない。

しかし、評者の判断する限りでは、伊藤氏が「独自の発想」と称されて世に送った論文の多くは、その「独自の発想」に相当の難点を抱えていた。少なくとも世界のゾロアスター教学の主流とは完全に断絶した考え方をなさる学者であつたし、多くの論文を英訳なさってはいたが、世界のゾロアスター教学者が殆ど取り合うところとならなかったのは、残念ながら事実である。「ユニークな発想」を追究なさる余り、評者の如き凡才からすれば途轍もなく突飛な主張を思いつかれ、しかもそれを逐一豊富な学識で論証なさろうとするから、結果的には「ごり押し」に近い論旨(しかも、素人には容易に反論で

* 東京大学大学院博士課程
Ph. D. Student, University of Tokyo

きない難解な論旨)になるのである。評者は、伊藤氏の学問的なバランス感覚には、かなり問題があったのではないかと判断する。

この現象には、伊藤氏が体力的に虚弱で国際学会への出席も一切なく、つまりは世界のゾロアスター教学者と交わる機会に恵まれなかったことが大きい。この為、伊藤氏は正当に評価されるチャンス及び正当に批判されるチャンスを共に失われ、伊藤氏に匹敵するゾロアスター教学者のいない当時の日本国内で、黙々と孤高の研究を進められた。そして、一度も学問的な軌道修正を図ることなく、独自の航路を一直線に飛行なさったのである。このことの当然の帰結として、年齢が進むにつれて世界のイラン学主流との乖離はいよいよ広まり、伊藤氏の「ユニーク過ぎる」傾向に拍車が掛かったと言える。

即ち、評者の観察では、伊藤氏の諸論文中、①優れた言語学的・文献学的能力が前面に出た論文、例えば古代ペルシア語碑文の解説や、ゾロアスター教パフラヴィー語文献の翻訳に徹した論文(比較的少なく初期の作品)は名作と言うべく、これに反して、②古代ペルシアと飛鳥・奈良時代の日本とを結び付けようと試みた論文(晩年はこちらに興味が移られたようである)ほど無理が多い。そして、この中間に、③アヴェスター語とサンスクリットとの比較を武器に古代ゾロアスター教の実態を追及なされた諸論文(このタイプが最も数が多い)が入るのである。

II. 本書の構成

本書は、論文14編と附論5編の計19編の、それぞれ独立した論考から構成される。この内、第1～6編及び付録ⅠとⅤは、上述の分類で③に属し、教祖ザラスシュトラの出生地、活躍年代、名称の由来、マギ集団の語義、ガーサーの解釈などの問題に触れている。次いで、第8～9編及び付録Ⅲは、上述の分類で②に属し、白鳳・天平年間のゾロアスター教徒の来日問題をテーマとしている。最後に、第7、第10～13編及び付録Ⅱは、上述の分類で①に属し、多岐に互る中世イラン語資料(パフラヴィー語碑文・文献、パルティア語碑文、パーザンド版文献)を翻訳している。因みに、ネストリウス派キリスト教を扱った第14編と、大秦をバルミラと同定される付録Ⅳは、伊藤氏としては異色の東洋史がらみの論文で、評者の分類法では何処にも納まりきらない。

以下の節では、この19編を均等に論評するスペースを欠く為、この①～③の分類に従い、評者がそれぞれの代表的論考と見做したものに焦点を絞って取り上げることにしたい。

III. ペルシア文化渡来学者として

1980年、伊藤氏はペルシア文化の古代日本への渡来を言語学的に立証しようと『ペルシ

『ア文化渡来考』を発表なさったのだが、発表直後からこの学説は四面楚歌の窮状に陥⁽¹⁾た。しかし、非常に一本気な伊藤氏は、得意のインド・イラン言語学を振り翳してあく⁽²⁾まで自説を譲られなかった。そうして生まれたのが、②に属する本書の3編の論考である。

このタイプの論文を執筆なさる際の伊藤氏の学問的方法論の特徴は、おそらく、音韻変化を極端に多用し、予想も出来ないような中世イラン語と古代日本語の単語同士を結び付けてしまう点にある。しかし、一般的に云って、有能な言語学者が自由自在に音韻変化を適用して個々の単語を改変していけば、どんな単語同士でもコジツケで「関係あり」と見做すことが出来るものである。特に、有名な言語学者が晩年に入るとタガが緩んでしまい、あらゆる単語を結び付ける傾向を持ち始めるのはよくあることで、現にイラン学者としては、あの H. W. Bailey も『ホータン・サカ語辞典』で暴走している。この種の作業を行う場合に必要なのは、似ている単語同士を見つけ出す能力と共に、自説が何パーセント程度の確率で成立するかを見極める感覚である。

それでは、伊藤氏の場合はどうであろうか？ 第8編に於いて、『万葉集』第160番歌中の「面智男雲」を「メニシルダクモ」と読んで、中世ペルシア語の mansr-dahm（この単語自体、中世ペルシア語文献中に在証がなく、伊藤氏の仮定上の存在である）と結び付け、一足飛びに「来日したゾロアスター教徒が天武天皇の病氣快癒の祈禱を捧げていた」と結論なさる論旨に、無理はないであろうか？ この結論に至るまでのイラン言語学上の手続きは精緻を極めており、部外者を完全に幻惑させるが、逆に評者の目には、伊藤氏がとめどなく暴走なされた証拠のように映る。これは伊藤氏の論文の全編を通して言えることだが、伊藤氏が「この単語は音韻変化では……」として説明を始められたら、かなり危険な学問的操作を開始なされたと見て間違いない。

また、これも全編に互って指摘出来る特徴であるが、伊藤氏は「ゾロアスター教研究」を標榜なさるにしては、その武器は専らインド・イラン言語学の能力に偏り、宗教学的方面には全く関心を払われなかった。この弊として、例えば第9編の論旨が挙げられる。伊藤氏は同論文で、法隆寺所蔵の113号香木のパフラヴィー語文字銘をかなり無理して LK と読み（評者が写真を参照した限りでは、Kが無理である）、to と訓じる操作によってこれを救済願文と解されている。しかし、評者の考えでは、この銘は個人名と見る方が良さそうである。何故なら、現代パールスィー神官の香木加火儀式は、殆ど例外なく死者の名前を記念する意図を示して香木を焚いており、冥福を祈ってのものは見出せない⁽³⁾。この点は、一度でも現地へ赴いてゾロアスター教神官宅を訪問すれば容易に見当が付く筈だが、伊藤氏の方法論には現地調査は全く含まれなかったのである。

IV. 古代ゾロアスター教学者として

古代ゾロアスター教の実態は、文献資料の不足から、多くの部分で謎に包まれている。そこで、欧米のゾロアスター教学者の主たる研究スタンスは、文献資料が割合豊富に残されている古代インド側の状況をパズルの完成画に見立て、ピースが5%も残されていない古代イラン側のパズルを解こうとしているのに似ている。加えて、大半のゾロアスター教学者が古代インド学の出身であるという事情も、このスタンスの隆盛に拍車を掛けている。例外的に中世イラン言語学を主力に据える学者として、古くはケンブリッジ大学の I. Gershevitch, 新しくはウィーン大学の C. Cereti があるものの、絶対少数派である。

このような古代ゾロアスター教研究の状況下、伊藤氏は、古代・中世のイラン語を漏れなくカバーし、しかもアラム語資料やアショーカ王碑文にまで手を伸ばして初期ゾロアスター教を解明なさろうとしていた。そして、この八宗兼学的学風の最終的成果が、③に属する本書の8篇の論考である。この広範囲に及ぶ学問的实力は、通常のスタンスを採るゾロアスター教学者一般を遙かに凌駕し、もし伊藤氏が欧米に生まれておられたら、目下古代ゾロアスター教学で一世を風靡している K. Hoffmann も顔色なかったかも知れない。

ただ、その学問的实力を駆使する際の伊藤氏の方法論となると、評者は若干首を傾げざるを得ない。上記のドイツ人教授は、例の「Andreas 理論」崩壊の後を受けて、とりあえず『アヴェスター』の「サーサーン王朝期原型 (sasanidischer Archetypus)」を復元して『ウルガータ版アヴェスター』と区別する作業をメインテーマとしている。着実な言語学・文献学的作業を以て一々のテキストを校訂されてくると、これは容易に反論できるものではない。この方法論の確実さの故に、ドイツのゾロアスター教学はいまだに世界をリードしているのである。

これに対して、伊藤氏の方法論はどうか？ 御本人は「無倦の精進と犀利な心眼がもたらした成果」(190頁)と表現し、岡田氏は「天才的なインスピレーション」(559頁)と解説なさっている。しかし、実際は、個々別々の事実や語彙を、時空を超えて関連付けようとなさるのみで、首尾一貫した手堅い方法論は見出せない。このことは、例えば本書所載の第2編によく現れている。伊藤氏は、語義不明の教祖名 *Zarathustra* を解釈するにあたり、これは「老駱駝の持ち主」を意味する教祖の「卑称としての法名」と解される。而してその論拠は、かなり危うい言語学上の操作を別にすれば、日本の浄土真宗で親鸞が「愚禿」と自称した事実との類似性に求められているのである。評者の知る限り、ゾロアスター教神官が本名とは別に「法名」を称したケースはないし、イラン人ムスリムが「法名」(ラカブやシュフラの意味で)を名乗るにしても、100%佳名を選ぶ。傍証と

してはこれらの事実の方が遙かに優先するだろうし、また、古代イランの神官と鎌倉時代の僧侶の間には何の関係もないと考えられるのだが、伊藤氏は敢えてこの論拠で強行突破を図られたのである。

また、別例として、付録 I と V でも、伊藤氏は『アヴェスター』中の単語 *dūraoša* の構造を、タキシラ碑文の単語 *'rzwš* の構造と結び付け、これを *dūra+uš+a* と分解した上で、「遠くを見させるもの」と訳されている。この語は、*dūr+ošas* で「破壊を遠ざけるもの」という通常の解に対しても異論百出で、別解を出そうとの意気込みはよく分かるのだが、突然『アヴェスター』をタキシラ碑文と比較されるのは唐突過ぎる。寧ろここでは、M. Boyce のように、トゥルフアン文書発見以降急激に発展した中世イラン言語学の成果を、そのままアヴェスター語に還元する方式を採って、一つ一つ確実な解を狙うべきだっただろう。因みに、彼女の方法は、例えば『アヴェスター』中の *staomaine* (ヤスナ 9-2) と云う *hapax legomenon* を、パフラヴィー語詩篇中の *stwmnyhy* やマーニー教パルティア文書中の *'stwmnyft* と引き当てて新解を出す方式で、⁽⁴⁾『ザンド』との対応関係のみに頼っていた従来の Ch. Bartholomae の方式に数段優る。そして、無論、突然タキシラ碑文を持ち出される伊藤氏の方式にも優るのである。この点に関しては、伊藤氏に「中世イラン語還元方式」を実行するに充分な稀有の実力が具わっていただけに、返す返すも残念である。

このように評者は、伊藤氏の卓越した言語学的実力が、恣意的な方法論の故に、必ずしも宗教研究に善用されなかったと判断する。生前の伊藤氏に、どこかの時点で有能なゾロアスター教学者が正当な批判の矢を放てば、あれだけの偉材がこのような結果にはならなかったろうにと惜しまれる。これは、日本のイラン学全体にとっての大きな損失であった。

V. イラン語文献翻訳者として

伊藤氏が、『アヴェスター』中の最古層たる「ガーサー」と、パフラヴィー語文献中の最難関たる『デーナカルド』の解釈に傾注された情熱は、正に一代の碩学の畢生の事業に相応しかった。このどちらかでさえ、通常のゾロアスター教学者にとっては至難の業なのにも拘わらず、伊藤氏は両方を関連付けつつ有機的に考察を進められ、多くの新訳を世に送られた。そして、このようにして完成された伊藤氏のイラン語翻訳の成果の一部が、①に属する 6 編の論考である。

その中でも、評者の見る所では、既に世界のゾロアスター教学者が縦論横説した観のある「ガーサー」解釈よりは、従来比較的手薄だったパフラヴィー語文献の解釈に於いての方が、伊藤氏の才能は一際光っていた。ここでは、伊藤氏のイラン語文献翻訳者と

しての業績を検討する為に、特に第12編の『断疑論』翻訳を取り上げてみよう。同書は、既に1945年にフランスの P. J. de Menasce が研究と翻訳を上梓しているものの⁽⁵⁾、後の「大学者ムナス」の盛名に引き摺られるとその評価を誤るのであって、実際には同氏が弱冠30歳の時の習作に過ぎず、学問的には多くの欠点を含む。ところが、これを訂正しようという学者がなかなか出現しなかったのには訳がある。一つには、同書がパーザンド版及びそのサンスクリット訳でのみ伝わり、それらから一タパフラヴィー語原典を復元して解読する作業が容易でないこと。もう一つは、同書の内容が、9世紀のゾロアスター教神官によるイスラーム(特にムウタズィラ派神学)やユダヤ教、キリスト教、マニー教への反駁をテーマとしており、古代ゾロアスター教を扱う通常のゾロアスター教学者には全然馴染みのない内容だったこと。実は、そんな事情から、評者も伊藤氏から同書の研究を強く慫慂されたものの(1995年11月1日付書簡)、結局は途中で放り出してしまった苦い経験がある。

同書は文法的に破格が多く難解で、若い頃のムナスがてこずったのも尤もである。然るに伊藤氏は、同書の文法的難解さを、パーザンド版を単語レベルで次々に改変することで解決しようと図られている。つまり、パーザンド版では文意は既に見失われていたと推測し、中世ペルシア語文献には在証の無い単語を、『アヴェスター』にまで遡って創出することで、文意を通されるのである。伊藤氏の正面から文献に取り組まれる学問への忠実さには感嘆するけれど、このような作業を通して復元された伊藤氏独自の『復刻・パフラヴィー語断疑論』が、パーザンド版テキストそのものとは似ても似つかない代物になっていることもまた、見逃す訳にはいかない。例えば、明白なアヴェスター文字を以て記されたパーザンド版の単語 andarag を、子音表記のパフラヴィー語単語 'ndlg=handrag の誤読だとし、この在証のないパフラヴィー語単語自体は、アヴェスター語 ham-drang から順次発展してこの形に辿り着いたとなさるのである。

このように、イラン言語学の知識を総動員して、意味不明のテキストにまで何とかして意味を通してしまう点が、伊藤氏の翻訳の特徴である。この方法に対しての批判は尽きないだろうけれど、従来のゾロアスター教学者が悉く敬遠していた難解な文献に兎も角も道筋を付けた点で、学界嚆矢の訳業であることだけは確かである。これで、キリスト教学者やイスラーム学者が容易に本書を参照できるようになった意義は大きい。

ただ、最後にイラン語文献翻訳者としての伊藤氏の最大の欠点を挙げておくと、余りにもイラン語文献中のアラム語詞に拘泥し過ぎた点であろう。この為、Bで始まる単語の大半を「アラム語前置詞 b^e プラス名詞」と解釈し、通常のイラン学者がとても許容できないような翻訳をされるケースが見受けられる。⁽⁶⁾ 今後の日本のゾロアスター教学者が伊藤氏の翻訳を参考にする際は、この「Bで始まる単語」の扱いにだけは充分な注意⁽⁷⁾

が必要である。

VI. 本書の活用方法

評者は、ゾロアスター教学者の先達としての伊藤氏を尊敬するに吝かでない積りである。しかし、氏への敬愛の念とは別に、後に遺された者としては、氏の業績の長所を継承して欠点を切り捨てる義務がある。その為、敢えて本書を批判的に扱い、今後の日本のゾロアスター教学者が如何にこれを読み取るべきかの観点を示した。

おそらく、本書の最善の活用方法は、①に分類される諸翻訳及び随所に散りばめられた訳文中から、イラン語文献の翻訳箇所を全て抜き出し、「伊藤義教氏イラン語文献翻訳集」を自分で作成して利用することであろう。これなら、上記の「Bで始まる単語」に関する欠点を除けば十分に信頼できる。これに対して、本書の個別の論旨は、もし継承するにしても③に分類される一部の論文に止め、相当の注意を払って補強する必要がある。そして、②に分類される論文の論旨は、完全に切り捨てるべきだろう。これが、我々が受け取った伊藤氏の学問的遺産の概要である。⁽⁸⁾

注

- (1) 最も痛烈な批判としては、『朝日ジャーナル』1980年5月2日号65-67頁の榎一雄氏の書評、及び8月号15・22日合併号43-45頁の再書評参照。
- (2) 同上誌5月30日号80-81頁の伊藤氏の反論、及び9月19日号84-86頁の再反論参照。
- (3) 日本語論文としては、中別府温和「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」『西日本宗教学雑誌』18 (1996), 13-25参照。
- (4) *W. B. Henning Memorial Volume*, London, 1970 参照。
- (5) P. J. de Menasce, *Une apologétique mazdéenne du IXe siècle Škand-Gumānik Vičār*, Fribourg, 1945 参照。
- (6) この件に関する伊藤氏の専論としては、Gikyo Ito, “Pahlavica IV. Aramaic Preposition *B* in Parthian,” *Orient* XVII (1981), 59-66 参照。
- (7) パルティア語文献中のアラム語詞をイラン語訓読する証拠として、春田晴郎「アウロマン文書 No. 3 (大英博物館 Or. 8115) の新訳」『オリエント』44/2 (2001), 131 参照。
- (8) 2002年3月に、評者は伊藤氏の旧・書斎を訪問する機会を得て、本書以外にも大量の未発表遺稿が存在していることを確認した。特にパフラヴィー語文献の翻訳や文法書・辞書の原稿には価値のあるものが多く、今後、『ゾロアスター教パフラヴィー語文献翻訳シリーズ』や『パフラヴィー語辞書』として公表する計画である。伊藤氏の学問的遺産は、分量的には、学会に公表されたものよりもこの未発表遺稿の方が多い。